

トライアローグ展

横浜美術館 2020. 11. 14～2021. 02. 28 愛知県美術館 富山県美術館 巡回

公立3館はそれぞれ、近現代の西洋美術が作品収集の軸の一つとなっていて、横浜の所蔵作品は20世紀前半が手厚く、富山は20世紀後半の戦後の美術を重点的に収集、愛知はバランス良く所蔵しているとされている。

この三館は、それぞれ優れた作品を所蔵しているが、一つのテーマで企画を立てるとき、単館では質・量ともの不十分な部分があったため、三館が対話を重ねて補い合って協力することで、夫々の収蔵品を合わせて「20世紀西洋美術」の魅力を引き出そうとするユニークな企画展の開催である。

本展は三館が共同し、夫々のコレクションを組み合わせることで20世紀西洋美を振り返るもので、三館が誇る「ピカソ、クレー、ミロ、エルンスト、ダリ、マグリット、ポロック、ベーコン、ウォーホル、リヒター」などの作品展示である。



左から、巨匠パブロ・ピカソ作の《青い肩かけの女》(愛知県美術館蔵)1902年、《肘掛け椅子の女》(富山県美術館蔵)1923年、《肘掛け椅子で眠る女》(横浜美術館蔵)1927年、《座る女》(富山県美術館蔵)1960年の「絵画作品4点」である。

これらの作品「4点」は、20～80歳頃までの制作品であるが、画伯の4作品を並べることで作家性や画業の変遷がはっきりと見えてくるとされている。

《青い肩かけの女》は、前期の有名な「青の時代」の作品で、後期のキュビズム(20世紀初頭の立体主義)の作品だけを見ていると、巨匠は絵が上手いのかどうか疑問に駆られるが、土台はやはり絵のうまさがあると評価されている。

《座る女》は、シュルレアリスム(超現実主義)の時代の作品で、赤色と緑色を基調としたとても派手で明るい色彩で描かれ、キュビズムの分析・解体と構築を用いて、作品に空間的な奥行きを見事に創出していることに興味がある。